



R18
Adult Only
成人向け

corruptio

-シスター・ルーチェが魔に堕ちるまで-

基本CG14枚

(本編49枚・文字無し差分44枚)

サークル：夢見町3丁目。

かつて魔の者によつて滅ぼされた小さな村
そのはずれにあつた小さな教会。

どんな者にも必ず救いは訪れる…。

そう信じながら
親をなくした孤児たちに手を差し伸べ
守り続ける者がいた。

シスター・ルーチェ。

微笑みは優しく、信心深い彼女は
近づくだけでも心が浄化されるような
聖なる力を秘めていた。

そんな彼女の前に
その力を良しと思わない存在が迫っていた…。

『その子を離してください…淫魔ブルローネ…!』

『あははっ! アタシが解放してやんなくても、
アンタの信じる神様が救ってくれるんじゃないかい?』



人に近い形をした魔から放たれる
無邪気な笑い声。

一瞬の出来事だった。

突然現れた淫魔に
子供を人質に取られてしまった。

今この教会に
淫魔に対抗する術などはない。

けれど……



「……貴女の言う通り、私は神に仕えるもの…
神は…必ずや私達をお守りしてくれます…!」

情けないほどに声を震わせながら…淫魔を睨む…。

「ん…危機感っていうものがないのかしら?」

私の言葉に
呆れたような態度をとりながら
淫魔は言葉を続ける。

「まあいいや、アタシの目的は
この子供じゃなくてアンタの体…
その交渉のお手伝いを
してもらってるだけだからね。」



『私の……体？』

予想外の淫魔の目的に呆然としてしまう

『この体も飽きちゃってねえ……
どっかのお姫様のだったかしら？』

『せっかくだし……アンタの体を
忌々しい聖なる力ってやつこと
アタシのものにしてみたくって。』

日常を壊そうとしている
この淫魔の目的は私の体……。
私自身を乗っ取り、
新しい体として
使わせろというのだ。

ただ、
今の体に飽きたという理由で。



「そんな理由で……子供たちを巻き込むなど……！」
「あら？おしゃれは大事だと思うのだけれど……！」

他者の体をまるで衣類であるかのように話す淫魔に
人の価値観など通用しない。

「……もし私が体を差し出すならば
子供たちは……？」

「もちろん手を出さないわよ？
アタシたち魔族は契約……
約束は破らないものだもの。
純粋なシスターさんは
ご存じなかったかしら？」

「……いえ、存じております……。」
ならばこの場を乗り切る手段は……

『いいでしょう、淫魔ブルローネ……！
私の体、奪えるものなら奪って見せなさい……！』

あえて淫魔の魂を招き入れ、自身で抗い、打ち克つ……！
失敗したとしても子供たちには危害は加わらない……。



犠牲は私1人だけ……。

大丈夫……神は決して私を
……私達を見放さない！

『あはは、アタシと中身で
勝負ってことかい！面白いね！』

それでもかつのは私……
そう淫魔は大きな声で笑った。

『じゃあ早速……その体、頂くよ……！』



淫魔は光のようなものに姿を変え、
勢いよくこちらに飛んできた。

これが淫魔の魂というものののだろうか。

恐怖がないわけではない…。
けれど…負けるわけにもいかない…!!



光が体にまとわりつき
徐々に何かが染み込むような感覚…

そして…全身に何かが這っているような
気持ち悪さに襲われる…。

「とても嫌な……感じ……でも……神は……必ず……!!」

「神様への想いつてやつも……
あんたの聖なる力つてやつもこの程度かい？」

先ほどまで対面で会話をしていた淫魔の声
頭の中に直接響く…。

その声とともに、まるで起きていられないほどの
眠気のようなものに意識を蝕まれていく…。



一瞬の静寂。

体はおそろく……今はどちらのものでもない。



淫魔の光は完全に体を覆った。

この体の支配者となったのは……。

『……』

「ふふ……!
こんな程度でシスターの体を奪えるんだったら
もっと早くに来ればよかったねえ。」

私の体は……私のもものではなくなっていた。
勝手に開く口、勝手に動く腕。

淫魔は嬉しそうにそれらを動かしている。

「そんな……! 私の……私の体なのに……!!」

先ほど私の中に響いていた淫魔の声とは立場が変わり
……今度は私の声が淫魔に響く。

「……いえ、ということはまだ……!!」



「……む……な……に……!?!」

精一杯の祈りと……子供たちへの想い。

それらが繋がって奇跡へと変わった。

「アンタ……アタシを飲み込むか……本当に面白いね……。」

そう言い残した淫魔の動きは止まり……私は……。



「なんと……おぞましいものの……」
少しめまいはするものの、私は体の感覚を取り戻した。
あの淫魔の声も、もう響かない。

勝ったのだ。

私は……私達は。

「シスター……？大丈夫……!？」

囚われていた子供が不安そうに話しかけてくる

「ええ……。あの淫魔は私のうちに封じられました
これでもう安心ですからね。」

私のその言葉で、囚われていた子も、
隠れていた子供たちもすごいよと喜び笑顔を見せる。
よかった……この笑顔を守ることができて……。





子供たちはみな同じ部屋で眠りにつく。

私は毎晩小さなランプを持ち、
彼らがしつかりと
眠りについていないかを確認する。

—今日のようない日は、念入りに…。

『…サン、あなた眠れないのね？』

布団の中でびくりと、小さな体が反応する。

サンは先ほどまで淫魔の人質となっていた少年の名だ。





「あ、あのシスター…
ごめんなさい…ちゃんと…寝る…」

まさか怒られるとも思ったのだろうか。
小さく震える声でサンは謝った。

今日…一番に恐怖を感じていたであろう。
そんな子に与えるべきは
怒声などではなく安らぎだ。

私自身も疲れからか頭がぼーっとする…。
いやそんなことより…
この子に早く安らぎを…

「サン…いつかへんげしやう。」



別室にサンを連れ出し、
自分の胸元へ抱き寄せる。

「し、シスター…!!」

サンは顔を赤くしながらも
他の子どもたちを起こさないようにと
小声で慌てている…。

ああ、なんて…**可愛い**。

「今日は恐ろしいことがあった日ですから
…眠れなくて当然です。」

「ぼ…僕…あつ…あ…!!」



サンのズボンに…膨らみが出来上がっていく。

『……サン。』

『し、シスター…僕…』

『お、おちんちんが……おかしくなっちゃって…』

私が名前を呼ぶと、
顔を真っ赤にしながら今度は泣きそうな声で
自分の状態を伝えてくる。



この子は何も悪いことはしていない。

申し訳なさそうな顔をするサンに
私がしてあげられることは…

ほら…子供が苦しんでる…助けてあげなきゃね…？

『やるべきこと』が頭に響く。

そう、そうだ…

もつとサンの苦しみを取り除いてあげないと。

『サン…安心してくださいね…』



私はサンを立たせ、彼の性器を露出させる。

「な、何するの……!!」

「大丈夫ですよ、あなたの
おちんちんを落ち着かせてあげるだけです。」

「えっ……え……?」



サンのペニスを頬張り、口内で転がす。

「こ、これ…シスター…なんで…あつ…あ…!!」

たっぷりの唾液でそれを包み、
舌でゆっくりとなめ回していく。

「あ…あ…う…」

困惑と快楽の合わさる表情。

初めてのことに声を漏らすしかないサンの様子が
…すごく…興奮する。



音を立てながら徐々に速度を上げて、
サンのペニスから私が求めているものを
吸い出そうとする。

……求めているものって…なんだったかしら…？



ふわりとした疑問はサンの声でかき消されていく。

『シスター…！ぼく、ぼくおしっこでちやう…!!』

『…!』



暴れだしたサンのペニスは私の手から離れ、
その中身を私に浴びせた。

「あ」

サンは射精した後、放心している。

「ふふ……気持ちよかったですか？
さあ、体をきれいにしてから部屋にお戻りなさい。」

「は……。」



『今度は…
もつと気持ちいいことを教えてあげますからね。』

『……!?!』

サンはもう言葉を発せる状態じゃないようで
ただ顔を真っ赤にして体を洗いに向かった。

ぺろ…

その姿を見送り、
ペロリと私はサンの精液を舐めとる。

『ああ…美味しい。』

なぜこんな美味しいもの、
今まで口にしていなかったのでしょうか…?



翌
日

「いけない、寝坊してしまいました……！」

昨日の淫魔の騒動で疲れが溜まっていたのか……

普段ならば誰よりも早く
目を覚ましていなければならぬのに
子供たちの足音で私は目を覚ました。

心なしか頭も重い……。

夜の見回りもちゃんとできていたのか、よく思い出せない。
・・・・・

「今日の夜はできるだけ早く眠りましょう……。」



夜

『この夜が待ち遠しかったの……♡』

サンと仲のいい子供たちが私の部屋へと訪れる。

『サンにシスターが教えてくれたって聞いたんだ!』
『ぼくのおちんちんも気持ちよくしてよ…!!』

『もちろんですよ……! さあ、あなたたちにも安らぎを……。』

私は彼らのちんぽを昨日のサンのように愛でていく…。



2日後

「シスタールーチエ、あの子達だけずるいよ!」
「早く僕たちのおちんちんも気持ちよくさせて...!」

「んっ♡ごめんなさい♡♡
ちゃんとみんな平等に愛と安らぎを与えます...っ♡♡」

ズリ
ズリ



4日後

『シスターのおまたの穴に
おちんちんを挿れるとすごいあつたかいんだよ!!』

にゅぽっ

『んひっ.....♡
私もっ子供ちゃんぽに擦られるの気持ちいい♡♡♡
『もうみんなシスターが夜に教えてくれることが
楽しみで仕方がないんだ...!』



数日後

おかしい。

疲れが一向に取れないどころか…
ずっと体が重くて仕方がない…。

ちゃんと眠っているはずなのに…
日中のあくびの回数も多くなった。

それと…。

この頃子供達の視線を怖いと感じてしまう時がある。
今までの優しい視線などでなく…

まるで……私の体を……



「すみません……シスター、ちょっと相談が……」

考え込んでいた私の耳に、年長の少年の声が入り込む。

「はい……ああ、ソレイユ……どうしましたか？」

「あの……シスター……俺……!」

「まってください、今もう少し近くに……。」

私はソレイユの近くへと歩み寄ろうとする。

「あっ……!？」



ぐらりとしためまいに襲われ
私は仰向けにベッドへと
倒れこんでしまった。

「シスター！」

おそらく心配してくれた
ソレイユが私の顔を
覗き込んで……。

「……え……？」



「相談する前に俺の言いたいこと
わかってくれるなんてすごいや…!」

「そ、ソレイユ…何を…!？」

駆けつけてくれたソレイユは
私の上に嬉しそうに跨っている。

「俺もシスターのこと
使ってみたかったんだ…」

「使う……?」

「何を言っているのです…!？」



「他の子は全員シスターに色々教わったけど俺は我慢してたから……!」

「何……何を……!」

ソレイユは叫びながら私の服をまくりあげる。

「……きゃ……!?!」

ガ
ッ
ッ
ッ
それにより私の
無防備な肌が晒される。

私の……下着は……!?!

いや……そんなことは今
どうでもいい……!!

「こんなことは許さ……おっ、ひよ……♡♡」

「俺、ちゃんと他の子に聞いたんだよ！
シスターのおっぱいは端っこの方を弄ると
元気になるんだって！」

「や……ふっ……♡♡」

「い」

「い」

「……!?……ふんひっ……♡」

何がどうなっているのか
わからない。



ソレイユが乳首に触れる度に
体が反応し、下品な声が体から溢れ出ていく。

そして……その度に脳裏に……
子供達との……知らない思い出が浮かび上がる。

毎晩子供達を誘惑し、
自らが淫らな知識を
植え付けていく記憶……。

「……このようなことは……
知らな……!!？」



状況を整理する時間などなく……ソレイユの指が私の大切な部分をなぞりだす。

「そこは……本当に……やめなさい……！怒りますよ……！！」

が が

掠れた叫びは、彼にもう届いてなどいかなかった。

「ちゃんとね、みんなに聞いたんだよ。おちんちんをいれる前には指とかでかき混ぜなきゃいけないって……。」

ソレイユの指が私の膣内へと入る。

「おっ…♡」

秘所に異物をいれることの違和感。
けれど…それにより発生する安堵…快楽…。

にゅふっ…

ああ、そうだ。
私はこれを知っている。

これでは物足りないことも
知っている…。

「…ソレイユ。」

先ほどまでが嘘だったかのように…

私の声は、すんなりとソレイユの耳に届いた。

乱暴な行動をやめ、私の次の言葉を待っている。

私は自ら静かに股を開く。



「みんなのおかげで私のおまんこは

いつでも準備万端ですから大丈夫ですよ…♡」

「シスター…!」

「んあっ……あ……シスターの……なか……俺……のおちんちん……た、たべられちゃう……!!」

自分の膣内にソレイユを招き入れて、締め付ける。

「大丈夫、怖いことなど何もありませんからね。」

そうだ。

私はこうして皆に毎晩愛と安らぎを与えていたのだ……。

「そのまま……思う用に動いてみなさい……!」



「んあっ……あ……シスターの……なか……俺……のおちんちん……た、たべられちゃう……!!」

自分の膣内にソレイユを招き入れて、締め付ける。

「大丈夫、怖いことなど何もありませんからね。」

そうだ。

私はこうして皆に毎晩愛と安らぎを与えていたのだ……。

「そのまま……思う様に動いてみなさい……!」

ずちゅっ

「ふっ…ふっ…シスター…!!」

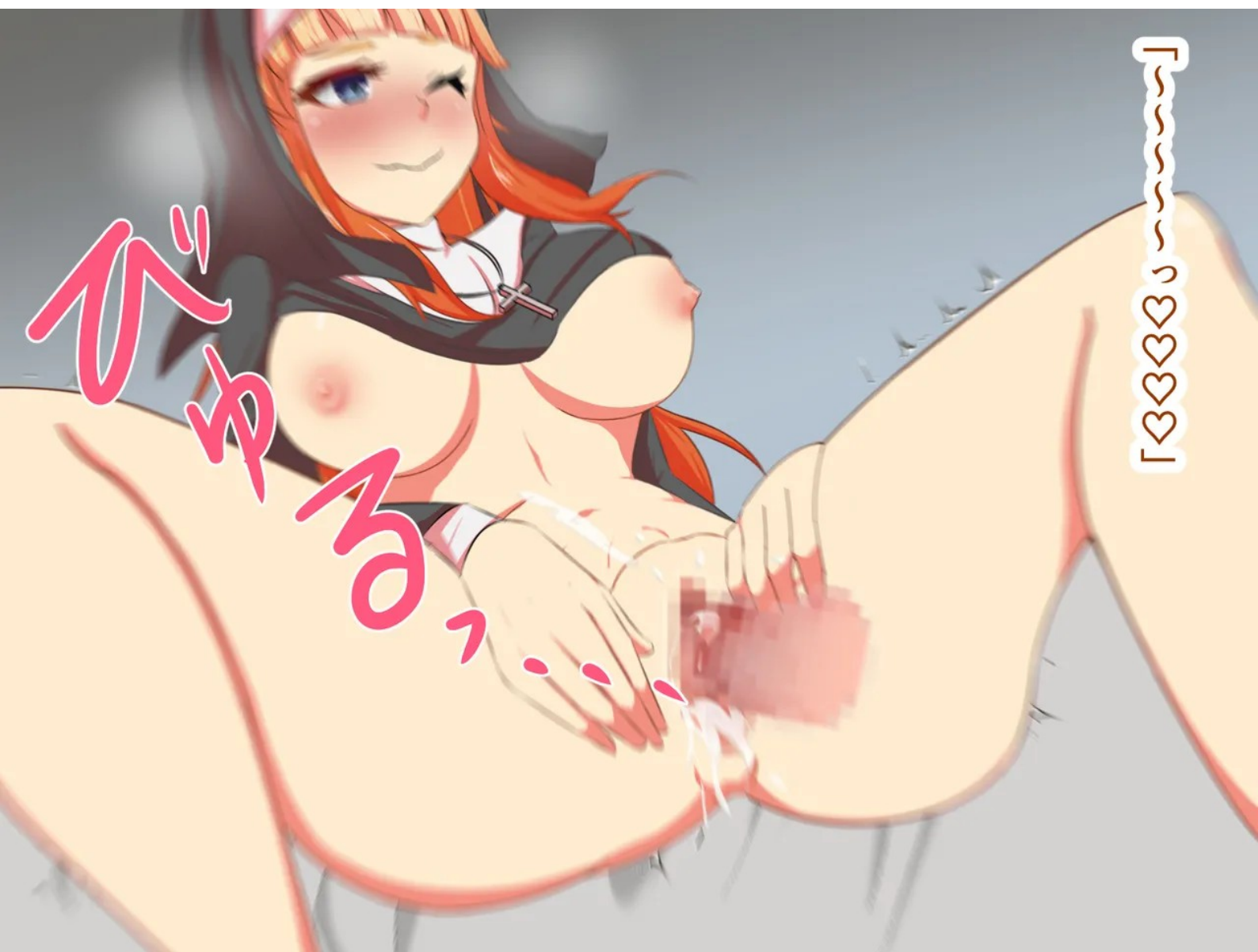
ソレイユは息を荒げて激しく腰を振る

先ほどの勢いだけの表情ではなく、
快楽をただ得るためだけの余裕の無い表情…
ああ、本当に可愛らしい……

「ふふ…そのまま射精しなさい…!!」

私の声がまるで合図であつたかのように
ソレイユは体を震わせて…





が
ゆるる...

~~~~~♡♡♡♡

ソレイユの精液を体に受けながら…

すべて、私は思い出した。

自分が戦った淫魔の力を…

抗った末に自身に吸収していたということを。

…結局は力に吞まれていたということを。

でも…こんな快樂…捨てることは出来ない。  
私も皆も元の生活に戻れはしないのだ…



?? 日後

「ああ、シスター。本当に助かりました…。このまま飢えて死んでしまうかと…。」

「あなたがここまで辿り着けたのは神のお導きですが…私も助けることができてよかった。」

旅人が教会を訪れたのは数日前。食料が尽きた旅人は文字通り、神に縋りここに辿り着いた。

運良くシスターから食料を分けてもらい命をつなぎ留めることができたのだ。

旅人の目にはシスター・ルーチェは女神のように見えたという。

「ああそういうえば、子供達にお聞きしました。シスター・ルーチェは過去にここに訪れた魔を封じ込めたとか…すごいお方なのですね…。」



?? 日後

「…特別なことなど何もしていませんよ。  
私の聖なる力が悪の力を奪った……それだけです。」

「シスター……？」

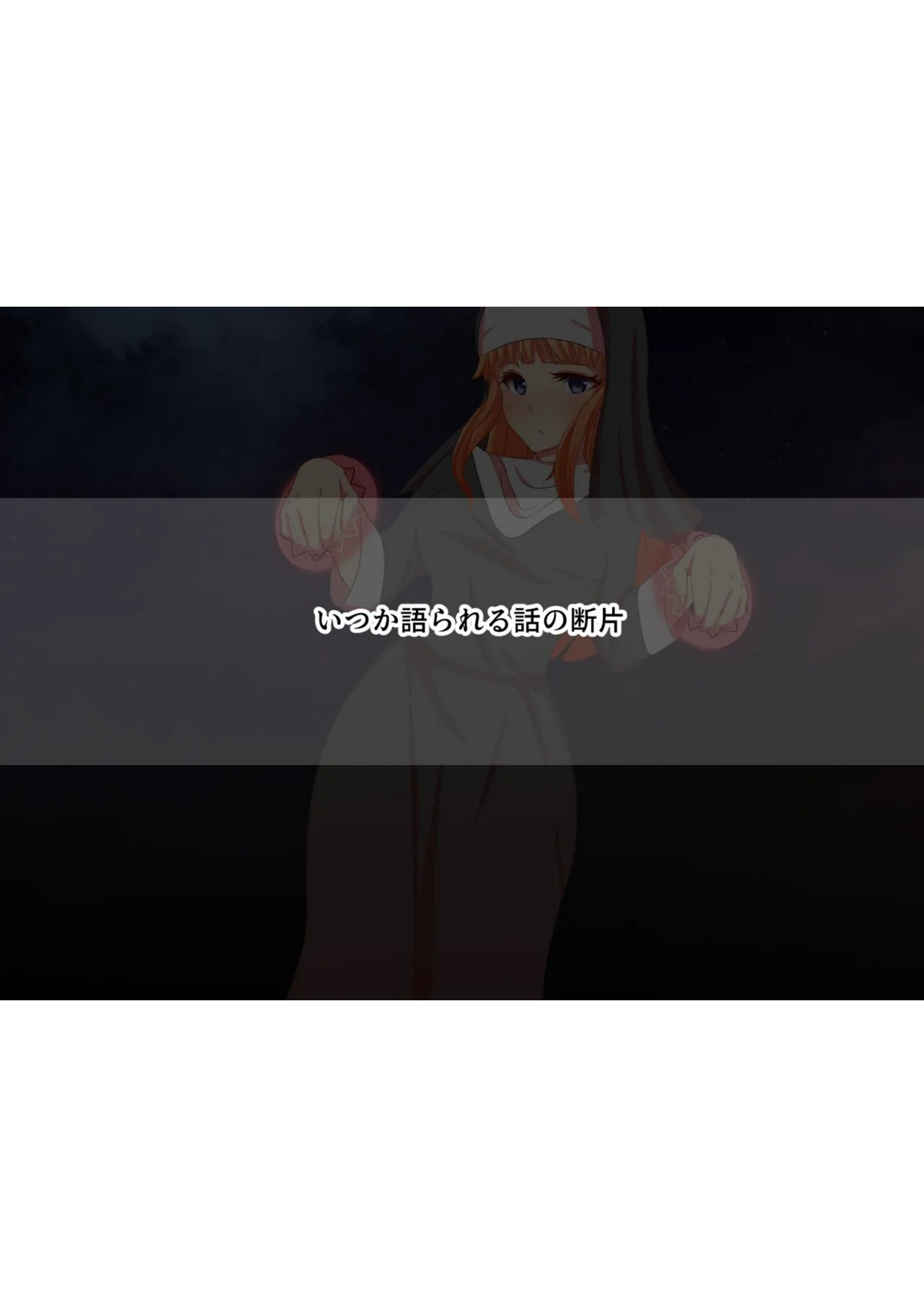
シスターの笑みは先ほどまでの優しい微笑みから、  
妖艶な笑みへと変わっていた。

「そうだ、あなたにも頂きたいものがあるのですよ……♡」

何を求められているのかなどはわからなかった。  
けれどおおよそ、金銭などではないということは  
本能で理解ができた……。

旅人の目には……  
シスター・ルーチェが悪魔のように見えていた。

fin



いつか語られる話の断片

『シスター！ルーチェを淫魔の乗っ取っているところ……』

『シスターのふりをして過ごしていたとは……その娘の体を返しなさい！』

見知らぬ祓い師達が私を拘束し私の存在を否定する……なんと馬鹿馬鹿しい。

ちゃんとあの馬鹿達に教えてあげなければ。

『私は確かに……淫魔の力に吞まれかけたことがあります。ですが私の持つ聖なる力はそれをも飲み込み……今はすべて私の力……。』

『まあ……あなたたちがそんなにもシスターである私を否定するのであれば……そうですね、そろそろ名乗りを変えましょう。』



『な、なにをする気だ……！  
やはりシスターではない……！』

私は……自らの内に感じる淫魔の力を解き放つ。



体を覆う光は……かつて淫魔ブルローネと  
対峙した際のものと同じ……。

あの時と違うのは……とても……心地が良いこと……！

私を覆う光は輝きを増し…私は…。



「改めまして皆さま…私の名前はルーチェ……  
…ルーチェ・ブルローネと申します。」

淫魔の名を引き継ぎ、欲望のままに性を貪るための姿  
祓い師達は、混乱のまま動けないでいる。

「ええ、ええ…普段はもちろん敬虔な神の使途……」

「ですがあなたたちがあまりにも私のことを淫魔だと……  
そうおっしゃるのですからご期待に応えて  
一人残らず絞めつけてあげます…フフ♡」

—その後、「淫魔ルーチェ・ブルローネ」の名は広がり……  
討伐隊が組まれるほどの存在となる。

彼女もまた抵抗のために自らの力を分け与え、  
同族を増やすことになるが……  
それはまた別の話。



























































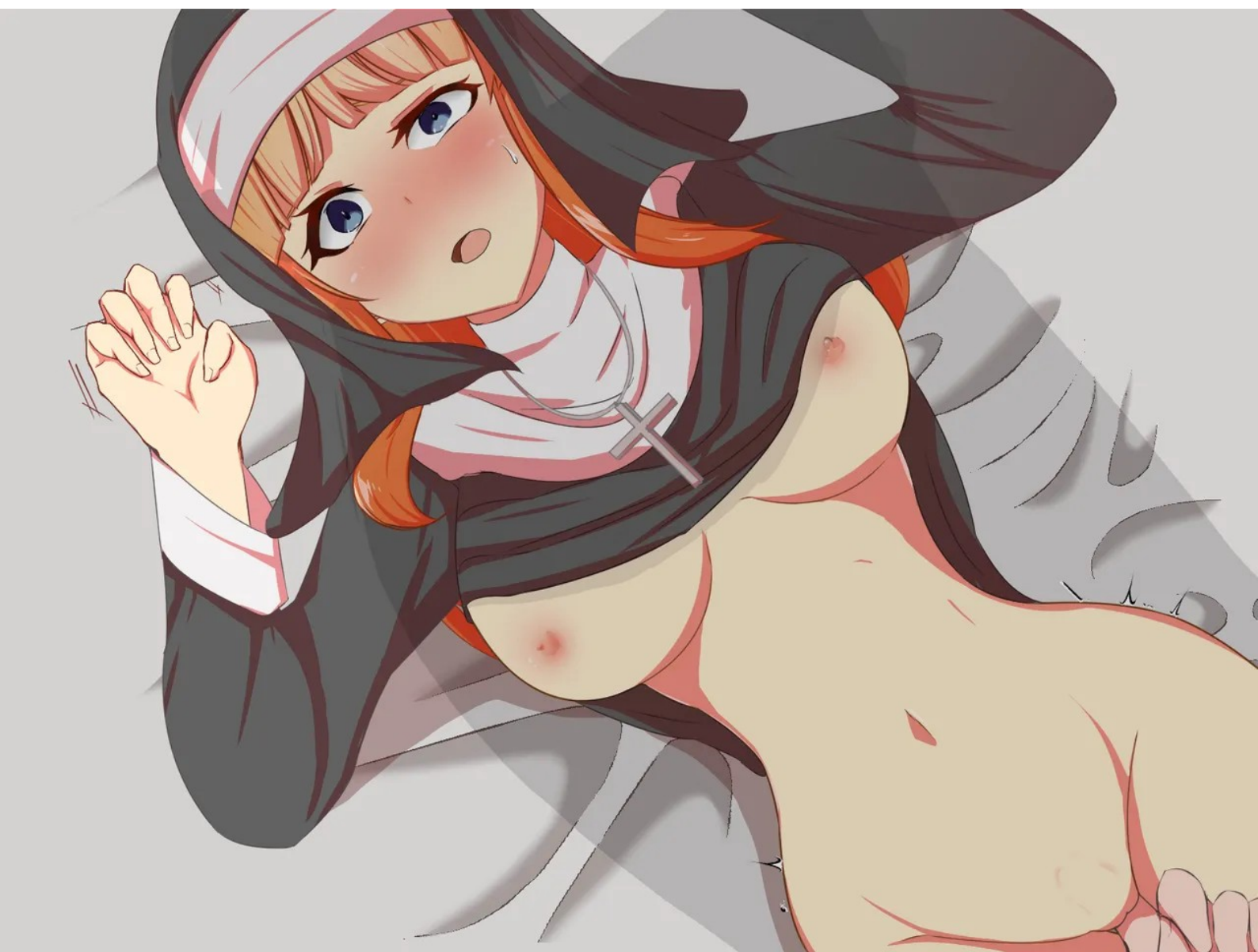


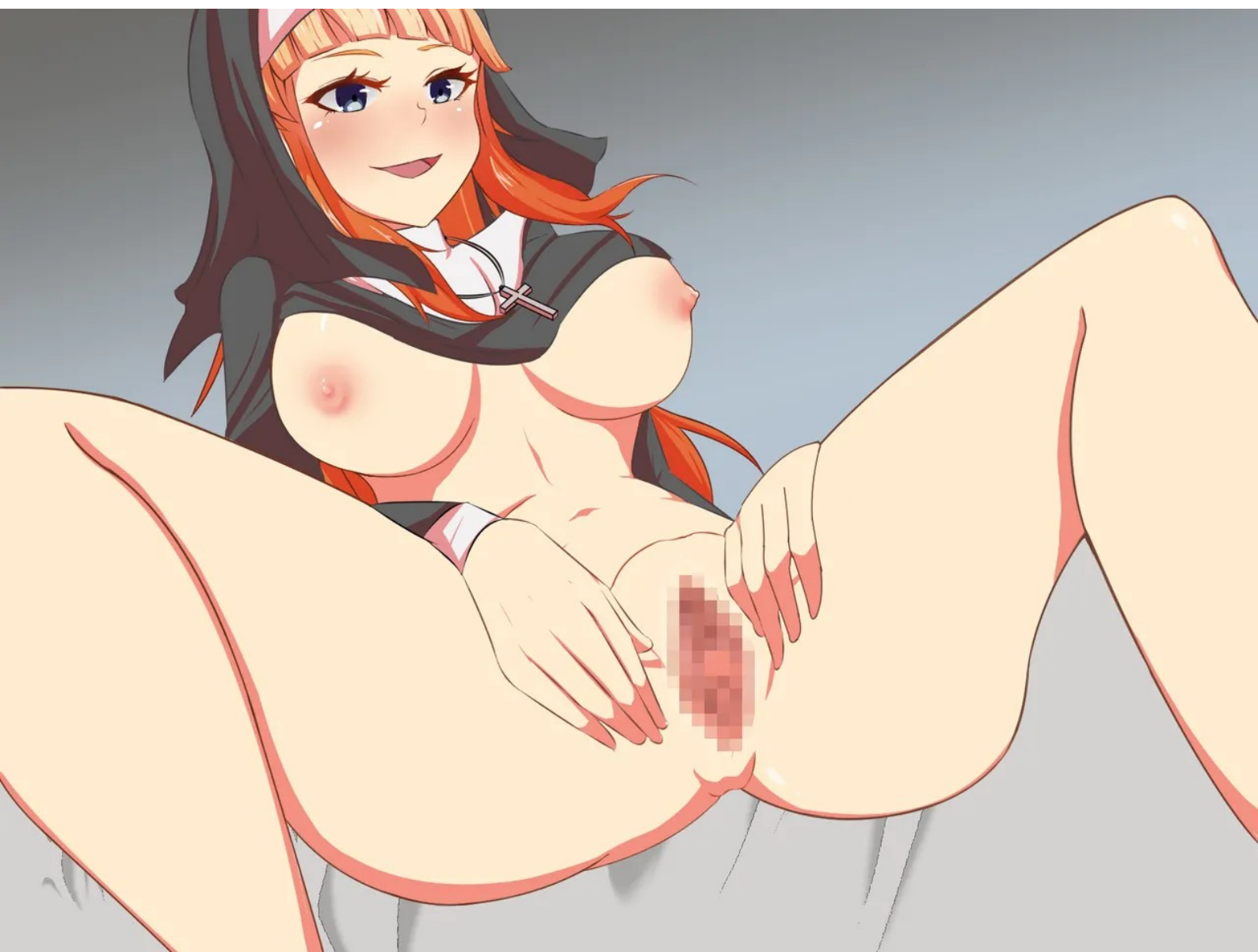






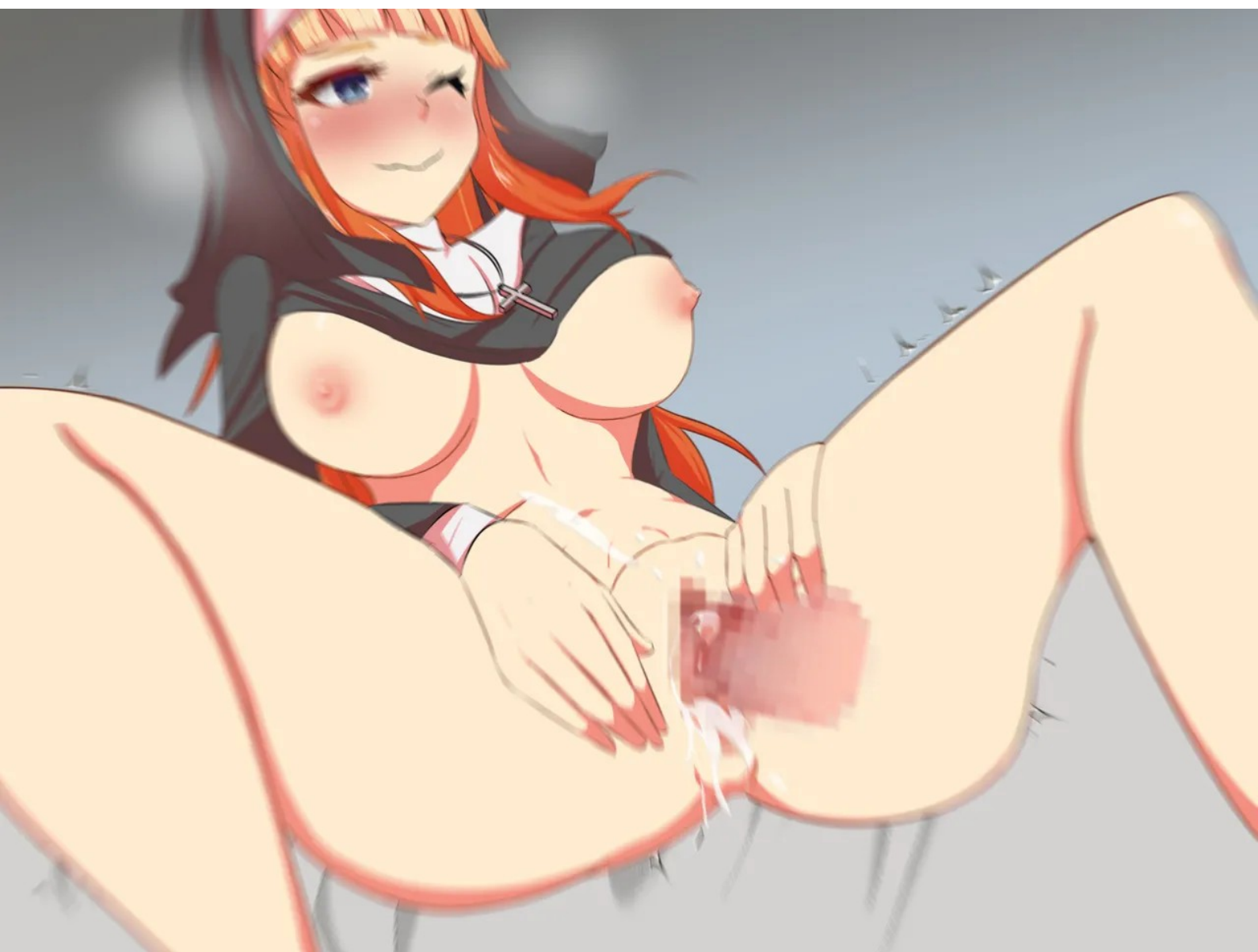


























#### シスター・ルーチェ

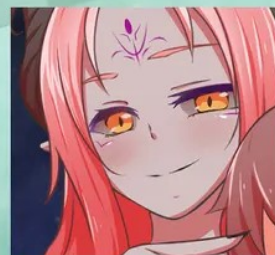
小さな教会に孤児たちを集めて暮らしていた心優しい少女。  
幼い頃からの信仰心が実際に力にもなり、内に聖なる力を宿していた。

淫魔ブルローネを体内で浄化しようとするが、浄化ではなく吸収してしまった。

#### 淫魔ブルローネ

気まぐれで享乐的な淫魔、本来は魂がメインの存在。趣味で人の体を使っている。  
過去に憑依したどこかの姫の体に飽きてきたのでシスターを狙う。

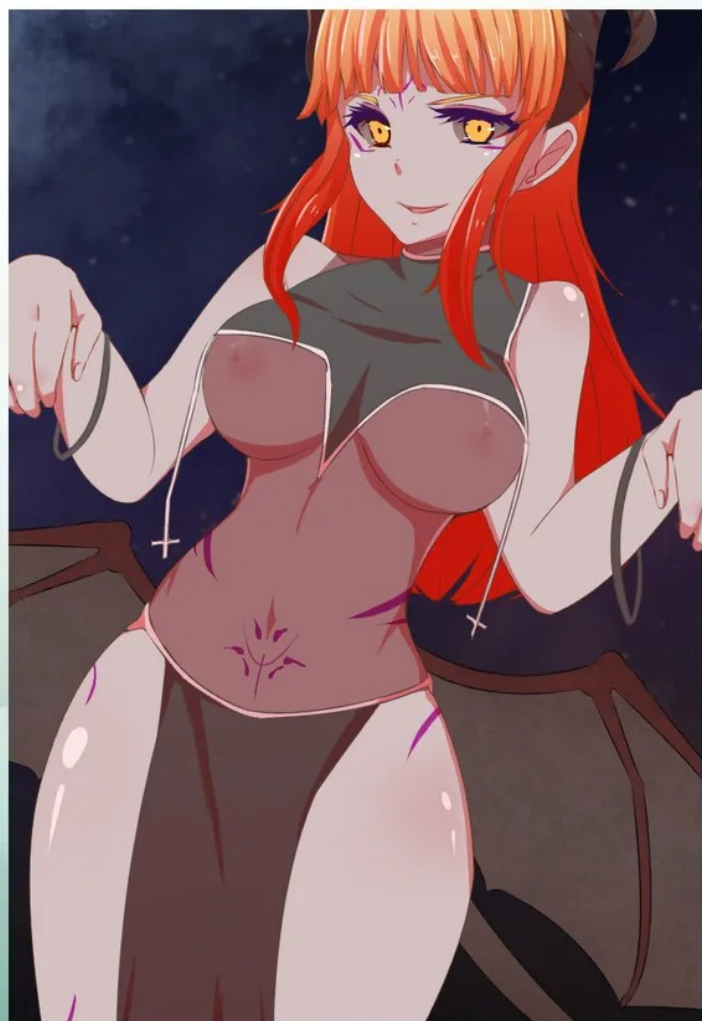
憑依してしまえば聖なる力ごと奪えると思っていたが逆に吸収されてしまった。



#### 教会の子供達

シスターによって助けられた孤児たち。  
淫魔ブルローネの襲撃の際にも助けられたが、その力を吸収し淫魔  
に近い存在になったシスターにより毎晩性行為を行うようになっていく。

シスターの愛の影響で干からびるほど吸精されるようなことはない模様。



### 淫魔ルーチェ・ブルローネ

ブルローネの力を完全に吸収したルーチェの姿。  
そう名乗ったのは結果的に快楽を教えてくれた淫魔への  
ルーチェなりのお礼。

少しばかり敵対者に厳しくはなっているが自分が  
神に仕えるものではあるという認識や子供への愛は  
残っている。

ブルローネとは違い魂だけの存在ではないので憑依等  
は出来なくなっているが、力が強いため分け与えて似た  
ような存在を増やしていくことは可能。



あとがき

こんにちは、北川です。  
ご購入いただきありがとうございます。

なんか…いろいろと…  
言い訳とかは…あるんですが…。

それはそのうち作品で伝える形にしたい…。

あ、でも一つだけ…今回ちょっとテンポを優先にして  
もしかしたら薄いと感じさせてしまうかもというのは  
あるので、そう感じてしまっていたらごめんなさい…！

最終的には淫魔となるルーチェですが、まずシスター  
であるということを大事にしたかったので本編があんな感じ  
となりましたが、この子で次回作を作るなら連鎖堕ちとか  
淫魔化TSとかにも手をだしたい感じですね。

それではこの辺で。  
本当に、ご購入いただきありがとうございました！

北川 凜